

## 古代足羽郡における本遺跡の位置づけ

本報告書の第 章で述べた遺跡の様相をまとめると次のようになる。

遺物はすべて包含層から出土した。7世紀末から8世紀前半までの個体が最も多く過半数を占める。都の土器様式に似せて、非常に多種多様な様式を構成する。これらは、SB01と関連する可能性が高い。

SB01は精密な設計をもとに建てられている。調査区内で最大規模の建物であることからも、周辺建物の中心的役割を担ったと考えられる。SB01を含む方位N 2°～3°Wの建物群は、一連の計画による建物群と評価できる。その計画性の一端として、桁棟を揃える同一規格の建物も存在する。

方位N 2°Wは、足羽郡条里制の南北線と同じである。条里制的区割りが反映された結果である可能性が高く、官衙的配置とも評価できる。SB01の柱は抜き取られていない。SB01廃絶後にこの土地周辺は利用されなかったことを示唆する。

この状況を踏まえ、土地環境なども考慮に入れて、遺跡の性格を考察してみたい。

SB01の規格 まず、SB01の様相の位置づけを考えてみたい。無廂のSB01の平面形式自体は、格式が高いわけではない。ただし、郡衙においても廂付建物は郡庁正殿の一部に限られる傾向がある。建物の平面規模は、100 m<sup>2</sup>を一定の基準として、それ以上の規模の場合は官衙か居宅とみなしうる見解が有力である。また、官舎では、50 m<sup>2</sup>以上の建物の割合が、居宅の2倍以上、集落の15倍であることも指摘されている<sup>(1)</sup>。この条件を当てはめると、SB01の規模は100 m<sup>2</sup>の基準にはやや及ばないが官衙・居宅のなかでも大型規模であることが分かる。

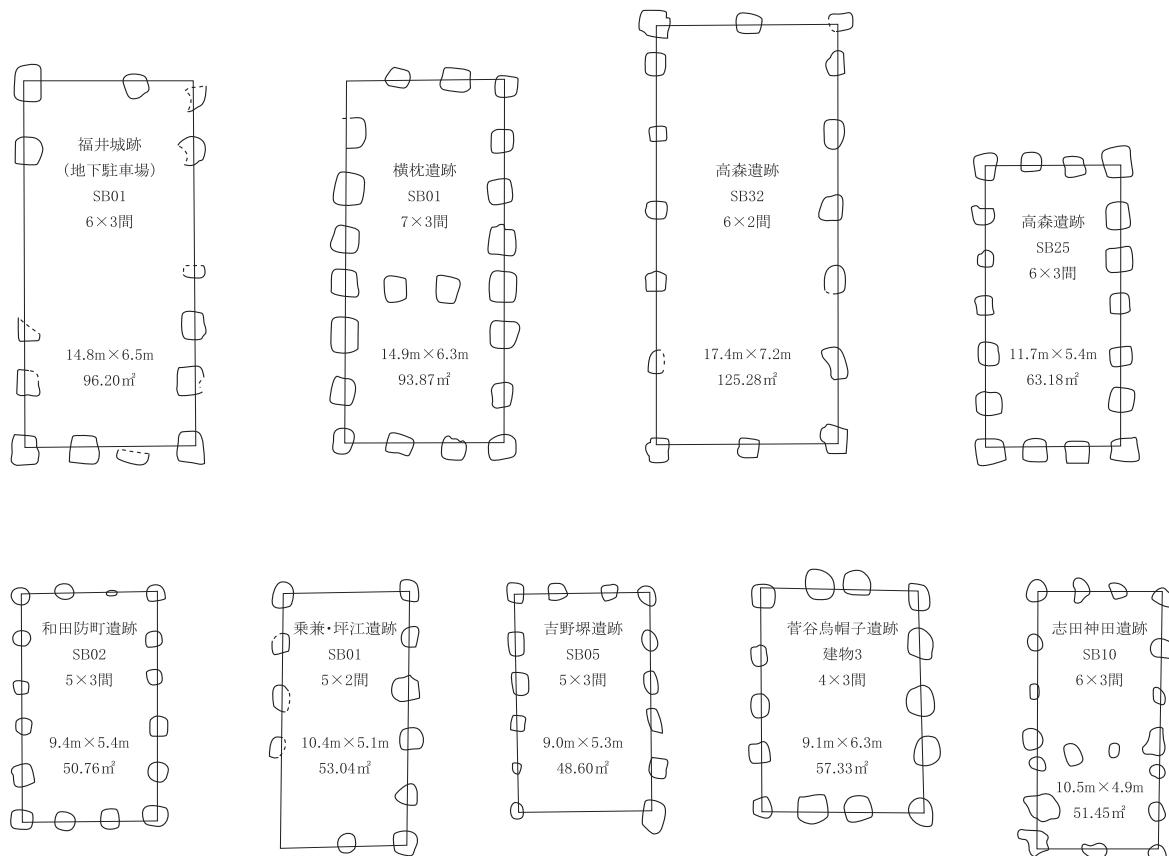


図207 福井県嶺北地方における大型掘立柱建物 (S=1/300)

それでは、SB01の平面規模はどのような位置づけをするべきであろうか。福井県嶺北地方の大型掘立柱建物と比較してみる（図207）。比較にあたって、比較対象に廻付建物は少ないからも、建物の比較は身舎部を対象とする。いずれにおいても遺跡の一部が調査されたに過ぎないため、遺跡の性格を表す主要建物とするには判断資料が少ないが、現状資料のなかでの位置づけを重視したい。

これらの平面の面積をみると、およそ50m<sup>2</sup>級の建物が多いことが分かる。それよりも大型の90m<sup>2</sup>級の建物として、本調査区のSB01と横枕遺跡のSB01がある。高森遺跡のSB25を含めて、これらは柱掘方の規則性が高い建物といえる。高森遺跡のSB32は面積こそ120m<sup>2</sup>級と最大であるが、柱掘方の間隔が不均等なため規格の高い建物とはいえない。たとえば、高森遺跡では同じ地域内に、SB25とSB32が存在する。SB25の方が面積こそ少ないが、建物自体の規格性の高さから重要性の高い建物と評価したい。SB25が南面の建物であることもこれを補足することと思う。つまり、高森遺跡の例からは、その遺跡内での重要性において面積よりも建物の規格の方が優先されると考えられる。そのため、福井県嶺北地方において本調査区のSB01と横枕遺跡のSB01は、大型かつ規格性の高い建物であり、その重要性の高さの反映といえるのである。

これらの遺跡の性格は、高森遺跡は官衙<sup>(2)</sup>、和田防町遺跡は豪族関連居宅<sup>(3)</sup>、乘兼坪江遺跡<sup>(4)</sup>・吉野塙遺跡<sup>(5)</sup>・菅谷鳥帽子遺跡<sup>(6)</sup>・志田神田遺跡<sup>(7)</sup>は荘園関連遺跡と推定されている。北陸地域の掘立柱建物を検討した結果、初期荘園の主屋規格は梁行5m前後、桁行10m前後を測るという指摘もある<sup>(8)</sup>。和田防町遺跡と比較すると、初期荘園の主屋規格と豪族関連居宅の主要施設に規模的な差はない。そのため、本調査区SB01を官衙級規模と判断してもよいと考える。

**周辺地域の環境** 本調査区の位置する福井市街地の遺跡は、福井城跡としてのみ周知されていたが、近年の発掘状況から古代以前の遺跡の存在が明らかになり、複合遺跡であることが判明してきている。特に、古代の遺構・遺物が検出された遺跡として、本調査区の他に、福井城跡4号線地点・同5号線地点・同右岸線地点があり、福井市史においても全容不明とされているが、中央3丁目の市営駐車場地点から検出した8世紀の井戸と墨書き器・和同開珎が報告されている（図208）。これらの遺跡の遺構検出面は約7m前後とほぼ同じ標高であることから、安定した平野が広がっていたと推測できる。

この市街地の足羽川を挟んで南側に足羽山があり、ここに式内社の足羽神社が鎮座することから、この周辺域を足羽郷に推定する見解がある<sup>(9)・(10)</sup>。そして、足羽郷は足羽郡の中心地であり、足羽臣の拠点とも考えられている<sup>(10)</sup>。つまり、神社名と郷名と氏族名が相互関連する状態を想定する。また、足羽神社の主祭神が阿須波神であることから、「アスハ」氏の氏神と考えられている<sup>(10)</sup>ことも、足羽臣との関連性が単に神社名だけではないといえる。

これ以外にも、足羽臣との関連付けとして足羽山に存在する古墳群を援用しようとしているが、その様相はむしろ否定的なものである。足羽山古墳群においては、古墳時代前期～中期に優位性の認められる古墳が連綿と造営されているが、古墳時代後期以降には認められなくなる。このように優位的な古墳が存続しない状況からは、足羽臣との関連性を想定しにくい。

それでは、足羽山周辺というのは足羽郡の中心地となり得る環境だったのであろうか。つぎに足羽山周辺の土地環境について検討してみる。

**足羽山周辺域の土地環境** 国土地理院の土地条件図<sup>(11)</sup>をみると、足羽川より南側の地域は、表層から地下20m付近まで腐植物まじりの軟弱な細粒物質層が存在するため三角州ととらえ、かつては九頭竜川が形成した扇状地・氾濫平野にせき止められていた沼澤地的な環境で、地盤が不良で地震にも弱い地域

と考えられている。(208)

近世中期編纂の『越藩拾遺録』には、近世以前においては浅水から山越えや山沿いを通行することで北庄まで至ったとの記載がある。

「冷泉為広卿越後下向日記」の通行地名からも同様の行程が想定できる。この記載から、福井平野の南部一帯は湿地帯であったため、これを避けて山麓を北陸道が通っていたという見解もある。古代北陸道もこれと同様の道筋が想定されていることから、この記載に依拠するところが大きいように思える。通常は直線的であるはずの官道でさえも、足羽山・浅水周辺では山越

えや山沿いを通る曲がりくねった道が想定されている。これを湿地帯の反映とする見解は地層の状態からも妥当と考えられる。現在においても軟弱地盤であるため、住宅建設にあたっては土地改良が必要と聞く。このように足羽山の東側周辺は沼沢的環境であり、古代において要衝とされるはずがない。西側は道守荘の推定地であり、寄進にあたり新たに土地を開発したことから、未開に近い土地柄といえる。

足羽山の北側の地域は、土地環境的には唯一安定した地盤を有する場所ということになる。この場所は足羽駅の推定地<sup>(9・10)</sup>ではあるが、土地の範囲が狭いため足羽郷として機能していたとは考えにくい。また、東西南北を足羽川と足羽山によって閉鎖され、移動に際してそれらを横断する必要に迫られることも条件のよい地域とはいがたい。

以上のことから、足羽川より南側の地域に要衝的性格を想定することは、極めて難しい状況と理解できるのではないだろうか。一方、足羽川より北側の地域の土地環境は、古代の遺跡が存在することからも安定した平野であったと推測できる。また、本調査区の東側に流れる吉野川が本調査区を迂回するように流れることからも、この地域が他よりも高いことを類推できる。

本報告書の第3章層序の図11にみられるように、吉野川の左岸は川の中州であり、右岸は自然堤防であったことが想定できる。右岸が自然堤防であったことを示唆する状況として、図5の旧地形をみても吉野川の流路が北側に存在した可能性は低い。また、現在の吉野川右岸域には、丸山や昭和40年代に消滅した平岡山といった独立丘陵がある。それらは足羽山の北東へ延びる丘陵線の延長上に位置していることからも、一連の地形変動により形成されたものと考えられる。そのため、吉野川右岸は自然堤防が展開し、さらに独立丘陵もしくは小高い地形であった可能性がある。足羽川右岸地域の生活痕跡に

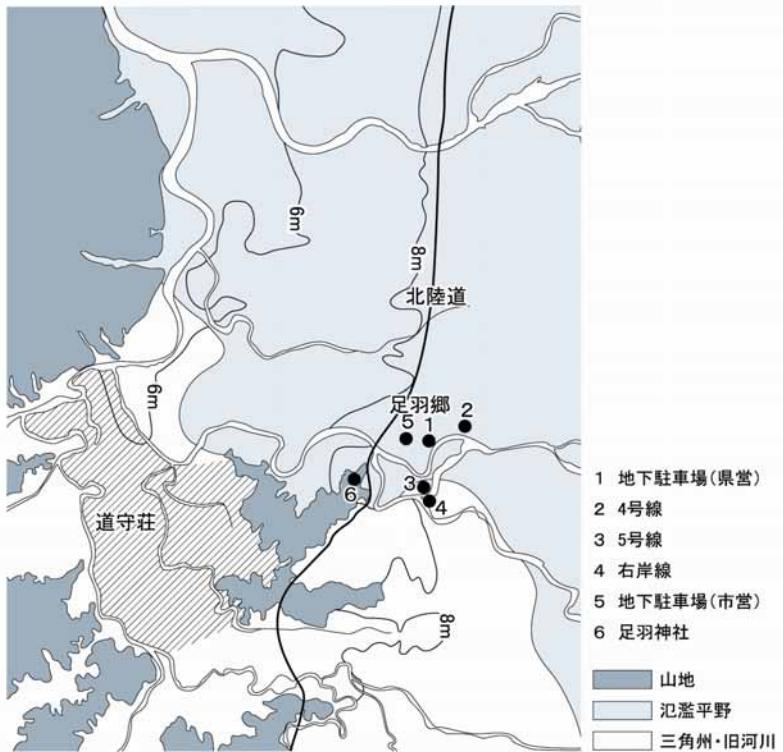


図208 周辺の遺構と地質 (S = 1 / 10,000)

についてみても、本調査区において古墳前期の遺構が存在するため、この時期には生活が可能であったことが分かる。また、神明神社の位置は福井城築城以前から変わらないとされ、このような重要施設の存在からも要衝的性格をもつ地域であったことが分かる。

以上のことから、足羽山周辺域において要衝的性格が認められる地域とは、足羽川北側の現在の福井市街地中心部に限定できると解釈したい。

足羽郡衙の可能性 今一度、市街地中心部の遺跡をみてみよう。4号線地点は7世紀末から10世紀前半の土器が出土し、方形横板組の井戸や掘立柱建物の規模および灰釉陶器・緑釉陶器・墨書き土器などから、一般的な集落とは考えられないと報告されている<sup>(12)</sup>。また、5号線地点はおよそ7世紀前半から10世紀後半の土器が出土している。本調査区も7世紀後葉から8世紀末までの土器が存在し、遺構は官衙級で遺物は中央志向が認められる。このような官衙級遺跡が複数存在する状況は、福井県嶺北地域において特別な地域といえる。

この状況は、足羽郡の中心地として足羽郷を想定した場合には、その条件を満たしていると判断できる。ただし、上記の遺跡は、遺跡の時期・遺跡間の距離・土器の様相から密接な関係にあったとはいがたく、足羽臣の拠点的な性格は見出しつらい。この関連性が認められにくい状況から、単独的な有力者を想定するよりは、むしろ複数の有力者の存在を想定するのが妥当ではなかろうか。つまり、この要衝地はいわば都市的機能を有し、複数の有力者の活動拠点であったと推測したい。その場合、上記の遺跡の時期やそれに伴う様相の差は、各有力者の盛衰や権力的な差の反映ともとれる。

本調査区は8世紀後半に衰退する。足羽郡において同時期に衰退する遺跡として、他にも今市岩畠遺跡がある。このことから足羽郡においては、8世紀中葉頃に集落の再編成を伴うような変革があったと理解したい。北陸地域ではこの時期の土器様相の画期が注目されている<sup>(13)</sup>。現状では資料の増加が望ましいが、初期荘園の展開と相反する8世紀後半からの衰退は、生江臣や足羽臣以外の有力者に関連する可能性が高い。勢力争いに敗れたと理解することもできる。また、土器様相に中央志向が認められることは、自身の権力の背景に中央の様相を取り入れようとしたことの表れではないか。そのため、本調査区の性格を、足羽郡内の豪族のなかでも有力な豪族関連居宅と考えたい。

(釘谷)

## 註

- 1) 山中敏史編 2003『古代の官衙遺跡』 遺構編 独立行政法人 文化財研究所 奈良文化財研究所
  - 2) 西野吉幸 1986『高森遺跡』 福井県武生市教育委員会
  - 3) 集落と想定する。水関係祭祀の主体として郷・村長の可能性もありうる。
  - 4) 公的施設を想定する。近辺に寺院関係施設の存在する可能性もある。桑原荘との関連も考慮している。
  - 5) 郷庁・荘所の可能性を想定する。中川佳三 2006『吉野塙大名地遺跡』『第21回福井県発掘調査報告会資料』
  - 6) 鳴野荘との関連を想定する。工藤俊樹・中森敏晴 1996『菅谷鳥帽子遺跡』『年報10』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
  - 7) 遺跡の性格について推定されてはいない。倉庫が規則的に並ぶ状況を、ここでは荘園的と評価した。
  - 8) 川越光洋 2003『志田神田遺跡』『年報17』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
  - 9) 楠正勝 1987『5章1節2掘立柱建物』『金沢市千木マシキダ遺跡』金沢市教育委員会
  - 10) 福井県史編纂室 1993『福井県史』通史編1原始・古代 福井県
  - 11) 福井市史編纂室 1997『福井市史』通史編1古代・中世 福井市
  - 12) 国土地理院 2004『土地条件図 福井』
  - 13) 北陸古代土器研究会 1994『北陸古代土器研究』第4号《特集:須恵器生産における8世紀中葉の画期》
- \*図207掲載の掘立柱建物の桁行・梁行・面積については、報告されているものはそれに従い、それ以外のものは公表された図面を計測し掲載した。

## 参考文献

- 水野和雄 1972『足羽郡足羽町篠尾廃寺調査概要』福井県教育委員会  
坪田聰子 2006『横枕遺跡』『年報20』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター  
山中敏史編 2004『古代の官衙遺跡』 遺物・遺跡編 独立行政法人 文化財研究所 奈良文化財研究所